報告　日本転倒予防学会 第 5 回学術集会（浜松）

～多職種で奏でる転倒予防のハーモニー～

・会　長：鈴木みずえ（浜松医科大学臨床看護学講座教授）
・副会長：立川厚太郎（社会福祉法人新潟県身体障害者団体連合会理事長）
　　山本智章（医療法人愛広会新潟リハビリテーション病院院長）
・日　時：2018 年 10 月 6 日（土）17：00 ～ 20：00，10 月 7 日（日）9：00 ～ 16：30
・会　場：アクトシティ浜松中ホール＆コングレスセンター，ホテルクラウンパレス浜松
　　〒 430-7790 静岡県浜松市中区板屋町 111-1

浜松医科大学臨床看護学講座教授の鈴木みずえ会長のもと，第5回学術集会が，アクトシティ浜松中ホール＆コングレスセンター，ホテルクラウンパレス浜松にて開催された。842 名が参加した。参加者の職種では，看護師 367 名，理学療法士 140 名，医師 79 名，作業療法士 33 名，企業関係者 67 名，教職・研究職 36 名，介護・福祉関係者 38 名，その他の医療資格者・医療関係者 19 名，運動指導関係者 10 名，その他 60 名と，多岐にわたっていた（職種については重複あり）。

浜松市副市長：鈴木伸幸氏

開会式では，鈴木みずえ大会長の開会宣言の後，地元浜松を代表して，鈴木伸幸浜松副市長より，歓迎の辞をいただいた。

●イブニングセミナー「進化を続ける転倒予防グッズ」 共催：日本転倒予防学会推奨品登録企業

座長：高杉紳一郎（佐賀整肢学園こども発達医療センター）
山本智章（新潟リハビリテーション病院）

講演：ミニレクチャー「初心者にも早わかり 歩行分析入門」：高杉紳一郎（佐賀整肢学園こども発達医療センター）
転倒予防に向けて，産学連携アプローチ：年岡英昭（住友電気工業株式会社）
加速度計を用いた転倒リスクの「見える化」：大坂裕（川崎医療福祉大学）
超薄型衝撃吸収床マットの開発：中島彰（光研化成株式会社）
「快歩主義」～高齢者用シューズ～：古賀稔健（アサヒシューズ株式会社）

座長：高杉紳一郎氏と山本智章氏

年岡英昭氏

大坂裕氏

中島彰氏

古賀稔健氏

〈山本氏コメント〉

高杉紳一郎氏のわかりやすい講演で歩行分析の進歩と転倒の関連性について理解を深めるとともに，転倒リスク評価機器，衝撃吸収マット，転倒予防シューズなどさまざまな視点で企業からのグッズの開発報告を聞くことができた。すでに商品化されて臨床現場にも役立っていることに感銘を受けた。本学会が目指す，多職種協働やバリアフリーの理念がもたらしてきた大きな成果であると思う。

年岡英昭氏は，腰に付けた軽量の加速度センサーにより，10 m 歩行中の計測値を 6 項目に要素分解し，歩容を捉える（見える化）システムを開発した経緯を報告した。

大坂裕氏は，住友電気工業開発の上記システムにおける加速度センサーの妥当性の検証を，既存の身体計測機器，動作解析装置に対して行い，さらには，地域在住高齢者を対象に行った検証について報告した。

〈高杉氏コメント〉

中島彰氏は，「分厚いために転倒が誘発される」といった従来の衝撃吸収マットの問題点を解決して，厚さわずか 5 mm の製品を開発した経緯を報告した。

古賀稔健氏は，つま先を 20 mm 巻き上げたつまずきにくい外形に，足部の動きを正しく誘導する ソール形状を付加した高齢者シューズ「快歩主義」を紹介した。

総合討論のようす

●大会長講演「転倒予防ケア学の課題と構築～認知症高齢者の転倒予防のハーモニーを基盤として～」

座長：菅栄一（菅整形外科・皮膚科クリニック）

講演：鈴木みずえ（浜松医科大学臨床看護学講座教授）

座長：菅栄一氏

鈴木みずえ大会長

〈菅氏コメント〉

会長講演は，本学会初めての企画であった。多様なライフサイクルにある人々が，その人らしく生きていくための生活の質の向上を目指した多様な学際領域や多職種が連携する実践的学問体系として「転倒予防学」が提案された。その実現に向けて，多職種で構成する転倒予防チームでリスク評価と情報を共有して，パーソン・センタード・ケアの考えに基づいた介入を継続するプログラムが示された。今学術集会のテーマとプログラムに込めた会長の思いの根幹を伺えた。

●特別講演「世界で活躍するまで～オペラ歌手の自己管理～」

座長：石川正恒（洛和ヴィライリオス）

講演：中丸三千繪（ソプラノ歌手）

座長：石川正恒氏

中丸三千繪氏

〈石川氏コメント〉

特別講演はオペラ歌手中丸三千繪さんにしていただいた。音楽に関係の深い浜松で中丸さんのお話を聞くのは大変意義深いと感じられた。生い立ちからはじまって，ニューヨークジュリアード音学院やザルツブルグへの留学，そしてイタリア ミラノのスカラ座でのマリア・カラス・コンクールでの初優勝（オペラ歌手コンクールで最も権威があり，それまでイタリア人以外が受賞したことはなく，また，今も唯一の日本人優勝者），そして今も世界中を飛びまわるオペラ歌手としての活躍振りを話された。その活躍を支えているのは自らの身体を鍛えることと，糖分を控えた食事内容だとも話された。最後に演壇の中央に出て，ハイヒールを脱いで，姿勢を正しく保つことの重要性，そのためには両足の外側３本の足指に力を入れることが大切なことを実演していただいた。講演後にはエジプトのカイロに向けて旅立たれるという忙しいスケジュールの中をご講演いただいたが，転倒しない体作りの重要性と常日頃の努力をご教示いただいた。（講談社から“マリア・カラス・コンクール スカラ座への道”いう文庫本も出版されており，一読をお勧めしたい）

●シンポジウム１「多職種連携のハーモニーによる転倒予防」

座長：原田敦（国立長寿医療研究センター）

山田実（筑波大学）

講演：大腿骨近位部骨折地域連携パスのなかで行う転倒予防：山﨑薫（磐田市立総合病院）

高齢者の転倒防止～感染徴候を見逃さない～：村上あおい（京都市立病院）

高齢者施設における転倒予防：下山久之（同朋大学）

転倒予防における病院内多職種連携の課題～薬剤師の立場から～：垣越咲穂（東名古屋病院）

座長：原田敦氏と山田実氏

〈原田氏コメント〉

地域連携，医療安全，アセスメント，薬剤などを多職種で奏でるとき，理想と現実の狭間で揺れ動くハーモニーは，不協和音も含んで今を総括していた。

〈山田氏コメント〉

多職種連携をキーワードに各シンポジストより，各々の施設における現状，課題等を示してもらった。今後，さまざまな施設・地域より多職種連携のグットプラクティスを集めることで，多職種連携で行う転倒予防の指針のようなものが作れるのではないかと思った。

下山久之氏

村上あおい氏

山﨑薫氏

垣越咲穂氏

総合討論のようす

●シンポジウム２「医療と工学の連携による転倒予防」

座長：立川厚太郎（新潟県身体障害者団体連合会）

橋口知（鹿児島大学）

講演：高齢者の歩行解析と不整地での歩行を支援するロボット杖の開発：伊藤友孝（静岡大学）

ベッドサイドにおける転倒予防対策：初雁卓郎（パラマウントベッドホールディングス）

高齢者の転倒リスク管理について～見守りシステム，ロボットを用いた転倒予防研究の成果～：近藤和泉（国立長寿医療研究センター）

座長：立川厚太郎氏と橋口知氏

伊藤友孝氏

初雁卓郎氏

近藤和泉氏

〈立川氏，橋口氏コメント〉

伊藤友孝氏は，高齢者の歩行を６パターンに分類し，A 分類（正常）以外は差こそあれ転倒の危険性を指摘し，さらに，不整地でも安定歩行に必要なセンサー付きロボット杖を開発した。初雁卓郎氏は，人的対策と物的対策の２つに分け，物的対策にセンサー技術等の工学の関与が必要であるとし，さらに，有効活用するにはリーダーシップ研修など人的対策が重要であると述べていた。近藤和泉氏は，SIDE を使い病院内での転倒リスク評価と AI を使った日本転倒予防の方向性，バランス訓練ロボットの適応，杖・歩行器ロボットの開発について述べた。総合討論では各演者がロボットに対しての有効性を説き，バランス訓練の重要性，夜間の排尿時の転倒予防などについて熱く意見を交わした。転倒予防にも AI，ロボットの使用の重要性を確認し，さらに研鑽が必要であるとし，討論を終了した。

【座長からの質問に対するシンポジストの回答】

・医療と工学の連携

伊藤友孝氏：異分野交流でニーズ把握。

初雁卓郎氏：医療での実践によって開発側が適切なニーズを把握。

近藤和泉氏：対等に接すること。

総合討論のようす

・排尿支援

初雁卓郎氏：生活パターンの把握とその改善が対策につながる。

近藤和泉氏：排尿の課題が施設入所の理由にならないための排泄支援ロボットの在宅での活用。

・ご自身の展望（転倒予防における）

伊藤友孝氏：「バスに乗ることができる人＝外で転ぶ人」でもあることから，初回の転倒を予防するために日常生活で取り入れることが可能な機器の開発。

初雁卓郎氏：高齢者が**一人で生活できる環境**づくり（例：一人でトイレにいける，介護を減らす）。

近藤和泉氏：**経産省・厚労省に**「介護ロボット」だけでなく，「**介護予防**ロボット」を，さらにその中に「**転倒予防**」を位置付けたい。

●パネルディスカッション１「市民とともに広げる転倒予防：地域包括ケアシステムとソーシャルキャピタル」

座長：北湯口純（雲南市立身体教育医学研究所うんなん）

岡田真平（身体教育医学研究所）

キーノートレクチャー：「健康格差社会と転倒予防」：近藤克則（千葉大学）

講演：近間でみんなが気軽に楽しく過ごせる集いの場～長野県東御市・井高いきいきサロンの取り組み～：岡田真平（身体教育医学研究所），白石幸男（東御市井高いきいきサロン）

「てんとうむし」による転倒退治の決め技（浜松市）：福園有加（LC ウエルネス），柳川敦子（浜松市市民代表）

運動で育む地域のつながり～地域運動指導員になって～（雲南市）：北湯口純（身体教育医学研究所うんなん），稲岡恵子（雲南市地域運動指導員）

座長：岡田真平氏

座長：北湯口純氏

近藤克則氏

白石幸男氏

稲岡恵子氏

柳川敦子氏と福園有加氏

〈北湯口氏，岡田氏コメント〉

キーノートレクチャーとして，健康格差問題の研究の第一人者である近藤克則氏にお話しいただいた。近藤氏は，長年の研究成果から，転倒にも地域差や健康格差があり，特に地域差の要因として地域活動，とりわけスポーツ活動が充実していると地域の転倒率が低くなることを紹介し，そのような活動をいかに地域で充実するかが転倒予防のカギと強調された。レクチャー後の各地域の発表事例に対し「専門職主導ではなく住民主体で取り組むことで活動が広がりやすくなる」「運動だけでなく楽しいことを優先して多彩なことに取り組むことが継続につながり，転倒予防にもつながるのでは」とコメントされた。

これからの転倒予防は，地域や人々のつながりの豊かさや，住民主体の取り組みをいかに充実していくかについて注目していく必要があり，参加者はさまざまなヒントやアイデアを得られたのではないかと思う。

学会として，転倒予防が地域として取り組むべき課題であると社会全体が認識できるような発信にも今後力を入れていくべきではないかと感じた。同時に，当日発表いただいたような市民主体の元気な活動を，後押しし続けていくことも重要であり，それがあってはじめて“市民とともに広げる転倒予防”が実現に近づくのではないかとも思った。今回を機に，やらまいか！　の浜松の地から“地域・市民とともに広げる転倒予防”という新たな転倒予防のムーブメントが生まれ，転倒予防の輪がますます広がっていくことを願っている。

●パネルディスカッション 2「最新転倒・転落アセスメント・ツールの展開」

座長：征矢野あや子（佐久大学）

上内哲男（JCHO 東京蒲田医療センター）

講演：転倒・転落アセスメントツールのあるべき姿：横田慎一郎（東京大学医学部附属病院）

赤十字病院における転倒・転落アセスメントの標準化：黒川美知代（武蔵野赤十字病院）

転倒予防の観点からみた介護老人保健施設における施設管理・システムに関する実態調査：杉山智子（順天堂大学大学院）

座長：征矢野あや子氏と上内哲男氏

横田慎一郎氏

黒川美知代氏

杉山智子氏

総合討論のようす

〈征矢野氏，上内氏コメント〉

昨年に引き続き転倒・転落アセスメント・ツールについての討議が行われた。横田慎一郎氏は，評価のあるべき姿として，アセスメントの実施自体が目的ではなく，医療の評価スキームと同様に転倒・転落を予防できたか，転倒・転落したとしても受傷しなかったか，受傷したとしても重症にならなかったかという患者アウトカムによって個々のケアを評価しなければならないと提案した。黒川美知代氏は，全国の赤十字病院において，転倒・転落予防のための考え方，アセスメント項目を標準化し，赤十字病院全体に提示した。今後は，手引き書および標準アセスメントの活用状況の評価，有効性の検証を行う予定である。杉山智子氏は，全国の介護老人保健施設を対象とした実態調査報告の中で，各施設における部署内のチームワークが転倒率に影響を及ぼしている可能性を指摘し，今後は組織作り，ニーズや使用可能性の手がかりを明らかにしていくとした。

総合討議では，多職種協働の中で他職種へ丸投げせず，中心となるスタッフが多職種を取り込んで実践していくことで，個々のアセスメント力・コーディネート力が高められるなどの活発な議論が行われた。

●ワークショップ 1「転倒予防指導士としての新しい活動を作ろう！」

座長：奥泉宏康（長野県東御市立みまき温泉診療所）

ワークショップファシリテーターリーダー：阿部邦彦（同朋大学）

アンケート集計結果報告：鈴木美佳（静岡市立清水病院）

ファシリテーター：転倒予防指導士

座長：奥泉宏康氏

阿部邦彦氏

鈴木美佳氏

意見交換のようす

〈奥泉氏コメント〉

2018 年 7 月の時点で 745 名の転倒予防指導士の活動を振り返り，今後の新しい活動を考えるワークショップを行った。最初に，鈴木美佳氏より転倒予防指導士アンケートの報告があった。次いで，永江浩史氏（ながえ前立腺ケアクリニック）が替え歌を交えながら転倒と排尿障害についての研究事例を，徳増知子氏（LC ウェルネスの）が紙芝居を用いた「転倒予防サポーター」活動の報告を行った。

ワークショップは，阿部邦彦氏の司会で 6 人ずつ 11 のグループに分かれ，ワークシートに「転倒予防活動の課題と目的」を書き出した後，各人が一人 3 分ずつグループ内で発表し，さらに，代表者による全体発表を行った。地域や病院で実践されている転倒予防活動の発表と共に，多職種や組織を超えた横のつながりが必要だという意見があった。許可を得たワークシート例を「転倒予防指導士コー

ナー」に掲示して共有した。

日頃，転倒予防指導士同士の横のつながりが少なくなっているので，多職種で話し合うワークショップは貴重な機会となった。

●ワークショップ 2「高度急性期医療の場での抑制しない看護へのチャレンジ」

座長：鮫島直之（東京共済病院）

講演：小藤幹恵（金沢大学附属病院）

座長：鮫島直之氏

小藤幹恵氏

〈鮫島氏コメント〉

小藤幹恵氏は，一般病棟での「身体拘束がゼロ」になったことについての発表を行った。抑制しないことが目的ではなく，患者が動こうとする理由を知る努力をすること，その理由に対応するケアを実践することを始め，カンファレンスで共有していった結果，看護する側ではなく，患者側の視点に立つことが，拘束されない患者の喜びとなり，ひいては看護側の喜びとなり，身体拘束が 0 になっていった。フロアから重大事故発生に関する問題点も指摘されたが，身体抑制をしないことが目的ではなく，患者の行動要因に対する先回りの取り組みの過程の中に転倒予防看護の重要なポイントがあることが分かった。院内転倒予防につながる新しい重要な問題提起となった。

●ワークショップ 3「転倒予防のより良い介入研究のために」

座長：上岡洋晴（東京農業大学）

金森雅夫（立命館大学）

講演：転倒予防の研究に必要な介入研究の研究方法論：上岡洋晴（東京農業大学）

転倒予防の介入研究に必要な統計学：金森雅夫（立命館大学）

転倒予防介入研究からの知見：島田裕之（国立長寿医療研究センター）

座長：上岡洋晴氏と金森雅夫氏

島田裕之氏

〈金森氏コメント〉

介入研究に必要な研究方法論として，上岡洋晴氏は，STROBE 声明チェックリスト，CONSORT2010，SPIRIT2013 声明など多くの資料を参照しながら研究の方法を具体的に示した。介入研究として必要な統計学として，金森雅夫氏は，人年法 person-year，人口寄与割合 PAF，Effect Size の統計手法を具体的に例示した。介入研究からの知見として，島田裕之氏は，運動および複合的介入が転倒予防に有効であること，施設でのマンパワーの増員および職員の適切な配置によって転倒予防が可能であることなど最近の知見を紹介した。

●スポンサードセミナー 1「AI による転倒予防」 共催：株式会社 FRONTEO ヘルスケア，エーザイ株式会社

座長：山本創太（芝浦工業大学）

講演：転倒転落減少に向けた取り組み～ NTT 東日本関東病院の挑戦～：中尾正寿（NTT 東日本関東病院）

看護記録解析に基づく AI 転倒転落予測システム：内山秀文（株式会社 FRONTEO ヘルスケア）

座長：山本創太氏

中尾正寿氏

内山秀文氏

〈山本氏コメント〉

中尾正寿氏にＮＴＴ東日本関東病院での転倒予防への積極的な試みを紹介いただき，内山秀文氏には，同病院の看護記録に基づく，AI による転倒リスクアセスメント技術開発を発表いただいた。フロアからは，記録を書く看護師の観察力，熟練度，文章力が転倒予測精度に及ぼす影響についての関心がよせられた。内山氏からは，検証可能な AI の特性を生かし，リスク検出のキーワード記述をフィードバックする可能性があることが回答された。

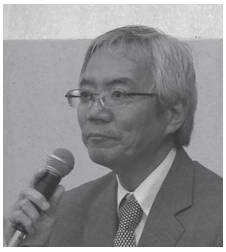
多職種連携の輪にAIも加わることで，効果的，効率的なリスクアセスメントを行っていく将来像をみることができた。

●スポンサードセミナー2「脊椎疾患から見た転倒とその予防」

共催：十全記念病院（浜松医科大学長寿運動器疾患教育研究講座）

座長：黒柳律雄（よみうりランド慶友病院）

講演：戸川大輔（浜松医科大学）



座長：黒柳律雄氏

戸川大輔氏

〈黒柳氏コメント〉

戸川大輔氏は，疫学研究に基づいて，高齢者の矢状面アライメント異常（前屈姿勢SVA＞40 mm）と転倒事故が関連していると報告した。この前屈姿勢の原因である脊椎椎体骨折に対するBalloon Kyphoplastyあるいは，脊椎多椎間固定術の適応，方法，結果が示された。

福岡県立医科大学の松下隆氏より，「骨折治療の主眼は機能回復とすべき」とのコメントがあった。さらに，戸川氏も松下教授も骨粗鬆症の予防，治療が重要であると強調した。

●ランチョンセミナー1「高齢者の骨粗鬆症・サルコペニアとビタミンD」

共催：中外製薬株式会社，ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

座長：萩野浩（鳥取大学）

講演：小川純人（東京大学）

座長：萩野浩氏

小川純人氏

〈萩野氏コメント〉

近年，超高齢者の増加にともなって，フレイル，サルコペニアが注目されている。これらの分野の第一人者である小川純人氏により，その病態とビタミンDとの関わりについてご解説いただいた。ビタミンDには多様な作用があり，筋肉に作用して転倒を防止するのみではなく，抗腫瘍作用も知られている。近年のビタミンDの臨床成績をお示しいただき，ビタミンDの高齢者疾患における重要性の理解が深まった。

●ランチョンセミナー2「睡眠薬の使用と転倒予防」

共催：エーザイ株式会社

座長：武藤芳照（東京健康リハビリテーション総合研究所）

講演：転倒リスクマネジメント〜看護ケアの立場から〜：佐藤晶子（聖隷三方原病院）

転倒と薬剤の関連性〜今日からできる転倒対策〜：加藤豊範（小林記念病院）

座長：武藤芳照氏

佐藤晶子氏

加藤豊範氏

〈武藤氏コメント〉

日常の臨床業務，介護施設での管理運営上，重要な課題の一つである高齢者の睡眠薬と転倒リスクに関わる講演2つを看護師，薬剤師の立場から行っていただいた。

1. **ま：毎晩の眠りの深さと長さをチェックすること。**
2. **さ：作用の特徴と睡眠薬の副作用の種類を知ること。**
3. **こ：高齢者の不眠とせん妄，転倒との関連に注意すること。**

講師のお一人佐藤晶子さんにちなんで，「まさこ」で，総括した。

■一般演題（口演，ポスター）

●一般口演

☆一般口演 1：「動作解析・開発」

座長：大高洋平（藤田保健衛生大学）

- **iPhone アプリ『Hacaro iTUG』による転倒リスクの定量的評価：山田茂樹（音羽病院正常圧水頭症センター）**
- **iPhone アプリを用いた特発性正常圧水頭症の歩行パターン解析：石川正恒（洛和ヴィライリオス，音羽病院正常圧水頭症センター）**
- **加速度歩行分析システムを用いた地域在住高齢者の転倒発生リスクの予測：大坂裕（川崎医療福祉大学）**
- **左右方向の床外乱に対する転倒の勢いについての力学的検討：後藤拓也（八木病院）**
- **地域在住高齢者における転倒リスク評価としての Timed Up and Go Test：加藤啓祐（慶友整形外科病院）**

〈大高氏コメント〉

市販 mobile phone のアプリケーションや加速度センサーを用いた動作解析とそれに基づいた転倒リスク評価，床外乱時の動作解析，地域住民の大規模な TUG のデータを用いたカットオフ値の検討などが発表され，活発な討議が行われた。特に，簡便で可搬性に優れる機器を用いた転倒リスクの評価については，今後の可能性を大いに感じさせるセッションであった。

☆一般口演 2：「認知症高齢者の転倒予防」

座長：泉キヨ子（帝京科学大学）

- **認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果～北陸のケアスタッフの転倒予防に対する意識変化の比較～：谷口好美（金沢大学）**
- **介護老人保健施設における認知症高齢者に対する転倒予防に関する介入プログラムの効果：古田良江（浜松医科大学）**
- **認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムからの学びと活用～北陸地区ケアスタッフのインタビューから～：丸岡直子（石川県立看護大学）**
- **認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果～関東地区における介護老人保健施設のスタッフの分析～：渡辺陽子（JCHO うつのみや病院附属介護老人保健施設）**
- **認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果～3 地区における 1 日あたりの転倒の発生率に関する分析～：金森雅夫（立命館大学）**

〈泉氏コメント〉

一般口演会場のようす

このセッションの 5 演題はすべて学術集会長の鈴木みずえ氏を中心にした認知症高齢者の転倒予防に関する介入プログラム効果に関する発表であった。これは関東，浜松，北陸の 3 地区における介護老健施設での認知症高齢者の転倒について教育などのプログラムを用いた介入施設とコントロール施設に分けて 1 年間検討したものである。ここでは介入したケアスタッフの意識変化や転倒率などを地区中心に発表し，最後は全体の転倒発生率であった。多職種による介入研究を通して転倒発生率は低下する傾向にあったが有意差はみられなかった。有意義で精力的な研究発表であったが，討論が少なかったのは残念であった。

☆一般口演 3：「転倒予防のための基礎データ・リスク評価」

座長：小松泰喜（日本大学）

- **老年内科患者における新規転倒発生の予測因子の検討：安延由紀子（大阪大学大学院）**
- **運動器疾患患者の MMSE 得点が転倒発生に与える影響：中口知春（角谷リハビリテーション病院）**

・胸腰椎椎体骨折後の再骨折の特徴について～再骨折時の転倒の有無による検討～：本郷成市（サンライズ酒井病院）
・大腿骨近位部骨折による入院患者への聞き取り調査内容の定量的分析に基づいた転倒に関わる環境要因の推定：内山瑛美子（東京大学大学院）
・回リハ病棟入院患者の ADL 過大評価と転倒の関連：樋剛輝（大阪大学）

〈小松氏コメント〉

各施設，医療機関で独自とは言わないまでも評価基準に則り転倒・骨折予防に取り組んでいることがよくわかる。それぞれで転倒事象は異なることから対応・対策も千差万別である。転倒・骨折が減らない限り「転倒予防のための基礎データ・リスク評価」は限りなく続く研究課題だと思われるが，これだけの演題数となった今となっては，学会主導で AI（人工知能）や機械学習の技術を取り入れ，その環境に問わず最適なリスクマネージメントを望みたい。

☆一般口演 4：「認知機能と転倒」

座長：梅原里実（高崎健康福祉大学看護実践開発センター）

・高齢者の眼球運動と前頭葉血流量からみた二重課題時の転倒発生機序に関する一考察：横山真也（山田病院）
・高齢患者の移動能力の自己認識は update されるのか？～自己イメージの update に関わる要因と退院後の転倒発生についての探索的検討～：篠崎未生（国立長寿医療研究センター）

〈梅原氏コメント〉

横山真也氏のテーマは認知機能低下の予防には 2 重課題が推奨されているが，歩行時に実施すると，「見ていても見えていない」のような注意喚起が必要であることを示唆する報告であった。

フロアより，2 重課題に計算のみとした理由について質問がなされた。「計算式が使用されていることが多い」という理由であった。また，眼球運動は周辺の視野とも関係が深いと思われるが注意喚起をとらえることができるのかとの質問に対し「今後の課題」とするとの回答であった。

篠崎未生氏の報告は，身体の変化の自己認識が認知機能に影響をすることについて，移動能力に焦点をあて，リハビリテーションでの効果が見られなかった患者を対象に退院時に評価し，3 か月後に転倒の有無を調査するという興味深い報告であった。フロアよりの質問，過小評価群の行動は生活行動範囲を狭くしたため転倒が減少したのではないかという疑問に対し，「生活範囲の評価はしていない」との回答であった。また過大評価群は MMSE の評価点数が関係しているとあるが，評価点について詳細を教えてほしいとの質問に対して，「14.7 点が平均であった」との回答であった。MMSE の特徴より評価点数だけでなく他の評価スケールを使用すると結果がより明確になるとの印象をうけた。

●ポスター

☆ポスター 1：「病院内における転倒・事故の実際」

座長：加藤真由美（金沢大学）

・A 病院で発生した転倒・転落インシデント・アクシデントからの実態調査と課題：江上直美（聖隷三方原病院）
・当院における転倒・転落報告事例からの提言～平成 29 年度の分析より～：舌間秀雄（産業医科大学病院）
・公立邑智病院における転倒・転落の現状把握：池本祐貴（公立邑智病院）
・転倒転落の現状と発生要因から導く転倒転落予防への取り組み～A 病院における転倒転落事案の分析～：前田智子（JA 広島総合病院）
・当院脳神経センター入院患者における転倒転落の現状分析：宮内尉江（東京共済病院）

〈加藤氏コメント〉

インシデントレポート等の分析を基に，病院内における転倒・転落の実際について 5 演題が発表された。転倒・転落は季節性があるため通年で捉えることは重要であり，すべての発表の観察期間が 1 年間以上であった。発表者からは自身の病院の現状を分析したことは初めてのことであり，これが転倒・転落予防のスタートとなり，これから分析結果を基に具体的に予防対策を進めていく旨であった。分析は客観的に現状を捉えられる非常に有益な方法であり，まだ分析を行っていない病院にその意義を示す貴重な発表となった。

☆ポスター 2 :「スタッフの意識」

座長：天野力郎（富士吉田市立病院）

- **病棟職員の行動変容を促した他職種連携～転倒・転落事故ゼロを目指した精神科病棟の取り組み～：深見瑞（愛宕病院）**
- **当院における転倒転落の現状・課題と今後の取り組み：岩崎しのぶ（周南リハビリテーション病院）**
- **A 病院における転倒転落予防に対する意識調査～ KYT 研修を通して～：白石樹里（浜脇整形外科病院）**
- **トイレ内での転倒を防ぐために～危険に対する理解力が乏しい患者様への関わり～：横濱美雪（南小樽病院）**
- **職員の医療安全に対する意識を高めるには？～転倒転落防止強化週間の取り組みを通して～：佐野哲也（すずかけヘルスケアホスピタル）**
- **多角的な視点で取り組む転倒予防：阿部彩夏（鳥取大学医学部附属病院）**

〈天野氏コメント〉

深見瑞氏らは精神科病棟をモデル病棟として，多職種 WG をつくり，職員の意識づけを行い，医療安全全般についての職員の意識が高まったと発表した。岩崎しのぶ氏らは 1 週毎の掲示物の張替えなどを行い，職員の観察力・注意力の調査を行いその結果を通して，全職員に KYT を行っていくことの必要性について発表した。白石樹里氏らは新人研修において KYT を行うことの有用性について発表した。今後の課題としてその効果の継続性が挙げられ，反復学習も必要と考えられた。横濱美雪氏らは転倒を繰り返す患者さんに介入方法を工夫することにより効果的な転倒予防が可能となったと発表した。佐野哲也氏らは年 3 回の転倒予防週間を設け，職員のみならず患者さんや家族にも周知することにより効果が得られたと発表した。強化習慣以外の意識の継続が課題として挙げられた。阿部彩夏氏らは大学病院において PT とのカンファレンスを通した活動やなどにより，チームとしての転倒予防の意識の高まりが得られたと発表した。

いずれの発表もそれぞれの方法での効果が得られたとのことであるが，多職種とある中で，主治医としての医師のかかわりが乏しいことや，薬による転倒を予防する観点から薬剤師のかかわりなどについては今後の課題と考えられた。

☆ポスター 3 :「急性期病棟」

座長：藤末洋（藤末医院）

- **大腿骨近位部骨折患者に対する急性期病院の取り組み 1 ～入院前の摂食嚥下機能の実態～:宮田栄里子（紀南病院）**
- **大腿骨近位部骨折患者に対する急性期病院の取り組み 2 ～食事形態の実際と食事形態変更の実施率～：和田望朱里（紀南病院）**
- **急性期病院に入院した神経内科疾患患者の転倒予防の検討：鈴木智子（磐田市立総合病院）**
- **急性期病院における脳卒中患者に対する転倒・転落予防ケアに関する研究～ベテラン看護師へのインタビュー調査から～：清水美香（浜松医科大学附属病院）**

〈藤末氏コメント〉

紀南病院からの発表 2 題では，大腿骨近部骨折の入院患者における摂食嚥下障害リスクが，入院前から非常に高い（53%）状況にあること，さらに術後入院中の食事形態の変更が少なからずあったことが報告された。口腔フレイルから発症する低栄養状態に早期から介入するには，歯科との連携が重要であり，術後には，管理栄養士との連携も重要であることが示唆された。

また，急性期病院入院の神経内科疾患患者を検討した 1 題では，転倒の危険因子として，入院 7 日以内，70 歳以上，排泄関連動作，15 ～ 18 時，カンファレンス未開催，身体症状が軽度で日常動作が自立の 6 項目が示された。

脳卒中患者に対する転倒・転落ケアについて，臨床経験 4 年以上の看護師へのインタビュー調査内容をカテゴリー化した結果，転倒関連の情報把握，生活を整える，統一したケアの提供，ケアを振り返る（リフレクション）の 4 つが明らかになった。今後は，多施設からの情報蓄積，AI による解析による，質の高い看護提供の可能性が示された。

☆ポスター 4 :「再骨折予防手帳」

座長：松本浩実（川崎医療福祉大学）

- **「転倒･骨折一次予防手帳」の作成～チームで取り組む転倒予防～:永冨浩志（東名古屋病院リハビリテーション科）**

・「再骨折予防手帳」を用いた多職種チームでの取り組みの評価と今後の課題：垣越咲穂（東名古屋病院薬剤部）

・骨粗鬆症リエゾンサービスにおける多職種協働の効果～オリジナル再骨折予防手帳作成過程での意識変化～：日比野淳（東名古屋病院看護部）

〈松本氏コメント〉

3題とも，東名古屋病院の同じチームからの発表であった。永富浩志氏からは多職種で作成した骨折予防手帳の紹介があった。会場からはその運用の方法や適応者についての質問があった。垣越咲穂氏，日比野淳氏からは大腿骨近位部骨折後の再骨折予防のために作成した手帳についての取り組み報告が行われた。骨折予防チーム以外の職種への転倒・骨折予防の啓発や知識の伝達が今後の課題となった。それぞれの骨折予防手帳は専門職の専門性を活かしたわかりやすい内容で高齢者でも理解しやすい内容となっており，臨床実践に用いられるツールとして完成度の高いものであった。

☆ポスター5：「病院内における転倒予防」

座長：内田泰彦（健康リハビリテーション内田病院）

・精神科病棟入院患者へロコモ体操を用いた転倒予防効果：近藤教（岩手県立大船渡病院）

・地域包括ケア病棟における転倒・転落の現状と対策～転倒予防ラウンド開始前後での比較～：加島知明（永山病院）

・転倒転落における医療安全管理委員会の活動とリハビリテーション技術部における課題：坪井歩（すずかけヘルスケアホスピタル）

・転倒発症した運動器外傷患者に対するポリファーマシー介入の小経験：西望（サンライズ酒井病院）

・A病院整形外科病棟の転倒の傾向～院内デイケア開始前後での調査結果比較から～：道下裕子（ベルランド総合病院）

・骨粗鬆症リエゾンサービスにおける転倒予防への取り組み～多職種連携により導き出せた効果と今後の課題について～：三塚里香（新潟リハビリテーション病院）

・精神科療養病棟における転倒予防運動スクエアステップの導入：中野ますみ（八事病院）

〈内田氏コメント〉

各演者とも院内転倒予防には多職種が連携することが大切であると発表した。

近藤教氏はロコモ体操，中野ますみ氏はスクエアステップの転倒予防効果を検証。加島知明氏は，ベッドサイドでの多職種間の情報共有が大切であることを再確認。坪井歩氏は， 医療安全管理委員会の活動が転倒転落の発生率を減少できることを示唆。西望氏は，減薬に対する患者の不安に対して傾聴や助言が大切であると発表。道下裕子氏は，院内デイケアは週2回では効果なく，週3回に増やして実施中。三塚里香氏は，多職種がベッドサイドカンファレンスを行うことで意識向上につながったと発表した。

☆ポスター6：「器具」

座長：岡山慶子（朝日エル）

・転倒転落による重症事例における既存脆弱性骨折の検討：田中雅博（永山病院）

・離床センサー使用時の人的要因による転倒・転落の実態調査と対策：渡辺浩志（富士吉田市立病院）

・神経難病病棟及び回復期リハビリテーション病棟に勤務の看護師に対する転倒予防センサーの使用に関する意識調査：村井敦子（東名古屋病院）

・ベッド4点柵の使用現状把握と今後の展望：鈴木美佳（清水病院）

・スノースポーツ転倒事故におけるプロテクターの必要性：石田夕子（日本スキー産業振興協会）

〈岡山氏コメント〉

器具によっておこる転倒・転落・骨折の事例研究，さらに，リハビリにおける器具の有効性，ケアする側の使用意識などが発表された。すべての発表において，学会冒頭にあった会長講演の趣旨である「多職種連携」を念頭におき，器具のつかい手である専門職はもちろん，器具もその重要なファクターであることを，このセッションの課題として，質疑を行った。そのことで，議論が集中できた。

☆ポスター 7：「回復期病棟」

座長：杉山良子（パラマウントベッド株式会社）

・回復期リハビリテーション病棟における転倒転落の現状：斎藤純（日本海酒田リハビリテーション病院）

・当院回復期病棟における転倒事例の検討：山口佑太（福知山市民病院）

・当院回復期病棟における転倒予防ラウンドの現状と今後の課題について：福留和也（合志第一病院）

・回復期リハビリテーション病院入院患者における足踏み時の変動性評価の意義：森口哲（京都リハビリテーション病院）

〈杉山氏コメント〉

回復期病棟からの発表において，転倒場面での特徴として車椅子およびその介助があげられていた。ハードである車椅子に特化したモノとその使用法の研究を深めてほしい。また，転倒予測の指標として歩行変動性が注目されていることから，簡便な方法としての足踏み変動性評価の実験的研究の追跡を期待したい。

☆ポスター 8：「退院に向けた取り組み」

座長：菅義行（菅整形外科医院）

・転倒予防パンフレットを使用した退院後の転倒予防啓発への取り組み：田村理恵（鳥取大学医学部附属病院）

・地域包括ケア病棟退院後の転倒事故に影響を与える重要因子の検討〜転倒ゼロの退院支援を目指して〜：寺脇知未（邑智病院）

〈菅氏コメント〉

田村理恵氏は，転倒予防パンフレットを使用した退院後の院内スタッフへの転倒予防啓発について発表した。転倒予防パンフレットを院内で啓発していく活動は重要であるが，院内全スタッフへの啓発研修までは至っていない，病棟等の患者への説明の際，パンフレット作成したスタッフは参加していないといった啓発の課題が指摘された。

寺脇知未氏は，包括ケア病棟退院後の転倒事故に影響を与える家屋調査や試験外泊の有無が重要因子であったと発表した。家屋調査のスタッフ構成（看護師，PT 等，ケアマネなど）によってチェックが異なり，他の医療機関からのスタッフ構成の違いについてなど意見があった。家屋調査チェックシートの必要性が示唆された。

座長自身としても無床診療所で，パンフレット作成，自宅での転倒予防などについて，患者にどこまで対応できるか自問した。

☆ポスター 9：「施設・地域社会における転倒」

座長：渡邊進（熊本機能病院）

・在宅高齢者の筋力の 1 年間の変化と歩行機能，転倒要因，健康関連 QOL の関係：稲垣圭吾（豊橋創造大学）

・大腿骨頸部骨折後に妻の死を経験した高齢者のリハビリゴール設定困難一事例からの考察：大河智織（オリジンフラワーサーチ大府）

・在宅酸素療法・非在宅酸素療法患者におけるサルコペニア調査：上野正典（高山赤十字病院）

・中山間地域の通所リハ利用高齢者の転倒要因と転倒がその後の生活に与える影響に関する調査：永井彩月（はるのケアセンター）

・高齢者の転倒における外的要因の事前認識についての検討：森田光生（慶友整形外科病院）

・入院時ベッドサイドインタビューと自宅訪問調査による大腿骨骨折患者の転倒状況の正確な把握：今枝秀二郎（東京大学大学院）

〈渡邊氏コメント〉

稲垣圭吾氏は，在宅高齢者の 1 年間の変化などを調査し，握力，全体的健康感（GH），ストライド長 / 下肢長が高いほど転倒リスクが低いことを報告した。永井彩月氏は，中山間地域の通所リハ利用高齢者は，下肢骨折後，古民家の構造が自宅復帰困難の要因であることが多く，家屋調査によるリスク抽出と住環境整備などを積極的に進め，地域における転倒予防活動，通所リハでの転倒予防リハを進める必要があることを発表した。森田光生氏は，高齢者の転倒は外的要因の存在が大きく，その存在を認識できるほど目立ったものが回避できない場合に骨折などの重大な外傷につながっていることを報告した。今枝秀二郎氏は，大腿骨近位部骨折患者の自宅訪問調査を行い，自宅住戸内の転

倒はトイレ関連の転倒が多く見られ，その転倒はトイレ内だけでなく廊下や寝室でも多く発生していることを報告した。

☆ポスター 10：「施設・地域社会における転倒予防」

座長：大関真理子（ブルーシー・アンド・グリーンランド財団）

- **介護施設における排泄障害を伴う認知症高齢者への転倒予防ケアの構造〜看護職・介護職のチームアプローチに焦点を当てて〜：内藤智義（浜松医科大学）**
- **介護事業所における，転倒予防指導士介入後の転倒の現状：高橋宏彰（くりのみ館）**
- **富士吉田市内の小学生に対する転倒予防活動 (2) 〜市・病院・小学校が連携して〜：相川禎孝（富士吉田市立病院）**
- **地域在住高齢者におけるスマートフォンを用いた多因子介入転倒予防プログラム後の変化〜 24 週間の転倒発生，認識ならびに行動〜：梶井文子（東京慈恵会医科大学）**
- **介護保険施設における転倒・転落防止を考える　その拘束は本当に必要なのか：舘林奈緒美（介護老人保健施設シルバーケア揖保川）**
- **地域在住高齢者における転倒経験と身体機能の自己認識との関連：尾曲真一（霞ヶ関南病院）**

〈大関氏コメント〉

各地域，施設などにおける，今回の学術集会のテーマである「多職種連携」の視点での取り組みについて発表があった。多職種連携は幅広くケアできる反面，現場では運営課題があることも否めない。今回の発表では各地域，管区担当者の努力によって支えられていることがよくわかる。地道ではあるが，多職種による「情報共有」と「意見交換」によって転倒予防につなげている。

このセッションでは「子ども」をターゲットとした取り組み，「スマートフォン」をツールとした取り組み，「転倒予防指導士」の取り組みなどが紹介された。実際に転倒が減少した取り組み，転倒数減にはつながらなかったが，今後に期待できる取り組みであった。今後も引き続き介護，看護の両面から「多職種連携」で取り組んでいただきたい。

☆ポスター 11：「体操・運動 」

座長：森田光生（慶友整形外科医院 / 慶友転倒骨折予防医学センター）

- **障害者支援施設における転倒予防 DVD 体操〜音楽・体操動作・映像画面への配慮について〜：武部敦子（障害者支援施設みさと）**
- **筋トレ効果のあるウォーキング指導〜しっかり歩きとゆっくり歩きを交互に行うウォーキングで筋トレにもなる効果的な方法です〜：斉藤良一（熟年健康くらぶ）**
- **移動能力向上を目的としたトレーニングの効果検証〜高齢女性患者の脊柱伸展機能と移動能力の関連に着目して〜：石巻詩織（北千葉整形外科）**
- **高齢者住宅における運動教室のあり方：横山結衣（介護付有料老人ホーム浜名湖エデンの園）**

〈森田氏コメント〉

武部敦子氏は，PT などの専門家なしに現状のスタッフのみで，重度知的障害者に対する運動を作成し，実施している活動を発表した。体操には重度知的障害者に向けたさまざまなアイデアがあり中でも，運動する部位を赤いシャツや赤い手袋などにして注視しやすい工夫はすばらしかった。斉藤良一氏（転倒予防指導士）は，ウォーキング指導について，実際に行っている風景やインターバル速歩のよさを講習会で得た資料を交えて紹介した。継続について，自由参加が一番望ましいとのことだった。石巻詩織氏は，移動能力向上を目的としたトレーニングの効果検証について，脊柱伸展運動と移動能力に関する報告を行った。ロコモ 25 による群分けでは両群ともに改善し，運動に関する有害事象はなかった。今後は，他のトレーニングと比較して今回のトレーニングが有効であるという検討を行っていくとのこと。横山結衣氏は，介護付有料老人ホームでの運動教室に関する検討について発表した。各運動項目を全国平均と比較し，平均以上で運動継続できている高齢者を KJ 法で分析し，今後に活かして行くということであった。

☆ポスター 12 :「フットケア 」

座長：平松知子（金沢医科大学）

・数回の足爪中心のケアで歩行改善，転倒予防につながった症例報告 ：茂木淳子（爪切り屋メディカルフットケア大阪）

・クロックスを履いている人が転ぶのか？：佐藤裕紀（東北海道病院）

〈平松氏コメント〉

茂木淳子氏は，宮川式フットケアの実施により，脛胝や足背浮腫の改善を認め，歩行が安定した 1 事例について，ポスター以外に画像も用いて報告した。佐藤裕紀氏は，クロックスの転倒リスクに注目して入院患者の履物と転倒の実態を調査し，いずれの履物でも転倒が発生したことを報告した。いずれも臨床現場からの着眼点は重要であり，さらに探求していただきたい。

☆ポスター 13 :「転倒予防チーム」

座長：田中英一（東海職業能力開発大学）

・転倒予防チーム主導による転倒カンファレンス充実への取り組み：笹木俊之（道後温泉病院リウマチセンター）

・A 病院における転倒・転落予防の取り組み～「転ばん隊」による介入の効果～：松本志保子（すずかけヘルスケアホスピタル）

・多職種連携による外来部門の転倒予防対策について実践報告：山本典代（聖隷浜松病院）

・当院の転倒転落予防対策班の活動報告～発足から半年の活動を振り返って～：島原範芳（道後温泉病院リウマチセンター）

・転倒予防対策チーム発足後の再転倒率の推移と今後の課題：吾妻勇吹（角谷リハビリテーション病院）

・B 病棟におけるベッドサイド転倒予防カンファレンス導入 3 年間の転倒要因の現状：荒金幹代子（九州大学病院別府病院）

・転倒転落時の影響度レベル軽減を目指した多職種での取り組み：川合みゆき（磐田市立総合病院）

〈田中氏コメント〉

質疑応答時間が 2 分しかなく，非常にタイトだったが，それにもかかわらず質問は各講演に対し 3～1 件あり，活発な討論がなされた。セッション終了後にも討論していた質問者と発表者もいた。講演は事例紹介が主な内容であったが，取り組みの効果についても発表されていたが，統計学的には検討は不十分である印象を受けた。質問については，各取り組みの内容についてさらに詳しい説明を求めるもの，特に質問者の施設と関連して，内容の確認を求める質問が多かった。

ポスター発表の模様

☆ポスター 14 :「動作解析・力学」

座長：二瓶美里（東京大学）

・目標物の安定性の違いが車椅子上におけるリーチ距離の見積もりに与える影響：袴田友樹（葛西中央病院）

・ステップ時間変動に影響を与える因子の検討：竹田圭佑（平川整形外科医院）

・転倒受傷した高齢患者は退院前でも歩行周期変動が残存している：森田貴司（シムラ病院）

・居宅内における独居高齢者の起居・座位動作速度と転倒リスク変数との相関：加藤真由美（金沢大学）

・多系統萎縮症患者に対する体成分分析装置と重心動揺計を用いて評価した一例～筋肉量と静的立位バランスの経時的変化～：原卓也（阪南市民病院）

・臓器や組織損傷を生じるエネルギーとその撃力：松浦弘幸（さくらクリニック）

〈二瓶氏コメント〉

袴田友樹氏は，車椅子からの移乗の際に，目標物の安定性によりリーチ距離の見積もりが，どのように変化するのかを調べた実験的な研究を発表した。今回は健常成人のみの結果であったが，転倒との関連も含めて，今後も研究を深めていただきたい。竹田圭佑氏は，高齢者の転倒とステップ時間変動に着目した研究を発表した。歩行時間の変動

が大きいと転倒リスクが高いこと，足底感覚の低下が歩行時間の変動を増加させる要因となることが報告され，フロアからそれらの機序などについての活発な議論がなされた。森田貴司氏は，転倒受傷と歩行周期変動係数の関係を調べた研究を発表した。再転倒を予防するために，歩行規則性などの歩行の質に着目する必要性を主張した。リハビリテーションの手法にどのように応用できるかについて，今後の展開に期待したい。加藤真由美氏は，居宅内での高齢者の起居動作と座位動作をセンシングして転倒リスク変数との関係を調べた研究を発表した。生活の場面における自然な動作が取得できるという点で有用なデータとなる一方で，解釈が難しい部分も多い。貴重なデータを活かしてさらに研究を深めていただきたい。原卓也氏は，多系統萎縮症患者の筋肉量，静的立位バランスを経時的に観察した研究を発表した。筋肉量の測定手法に課題が残ったが，重心動揺と体調の関連が観察できたことが報告された。患者の体調把握やその対応方法が転倒予防に重要であることが述べられた。松浦弘幸氏は，転倒などの外力により臓器の組織がどのように損傷するのかを調べた研究を発表した。筋骨格モデルのような人体モデルでは把握できない内部損傷などの予測やその解析結果を転倒受傷の重症化を低減する対策などに役立てて頂きたい。

☆ポスター 15：「疾患と転倒」

座長：立入久和（たちいり整形外科）

・透析患者の骨格筋量と立位姿勢制御能力の関連：大沼陽子（矢吹病院）

・2 型糖尿病患者の歩行自己効力感と歩行・バランス機能についての検討：濱島一樹（北里クリニック）

・脊椎疾患患者の転倒事例分析を基にした予防対策の検討：森下真衣（聖隷浜松病院）

・当院入院がん患者の転倒について〜転倒インシデントレポートからの調査〜：射場靖弘（鳥取大学医学部附属病院）

〈立入氏コメント〉

本セッションでは透析患者のバランスが低下していること，2 型糖尿病患者の転倒不安感が強いことが報告された。また疫学調査として，脊椎手術後とがん患者の入院中転倒事例報告が行われた。

☆ポスター 16：「転倒予防のための基礎データ・リスク評価」

座長：村山明彦（群馬医療福祉大学）

・転倒対策シートを導入して転倒による重篤な外傷の予防を試みる：池尻真理子（川島病院）

・当院入院患者における転倒者の傾向と今後の課題：上村友紀（吹田病院）

・転倒・転落アセスメントシート変更後の傾向と分析：兼平華江（川西病院）

・ロコモ 25 と転倒リスクの関連について：太田隆二（国立長寿医療研究センター）

〈村山氏コメント〉

池尻真理子氏は，転倒による重篤な外傷の予防を試みるために，「転倒対策診断シート」を導入することが有用であると言及した。上村友紀氏は，看護師とリハビリテーション専門職が実施した転倒リスク評価結果の共有方法と，今後の課題について紹介した。兼平華江氏は，急性期病院において盲点となりやすい転倒ハイリスク者の特徴を，アセスメントシートを用いた結果を踏まえて示した。太田隆二氏は，ロコモ 25 が転倒リスクの評価，フレイル，サルコペニアのスクリーニングとして活用できる可能性を報告した。

■転倒予防指導士コーナー，転倒予防推奨品（おやくだちグッズ）コーナー，書籍展示

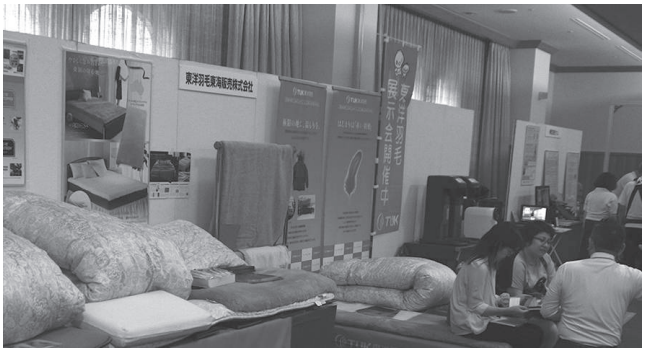
おやくだちグッズコーナー

書籍展示のようす

指導士コーナー

●企業展示

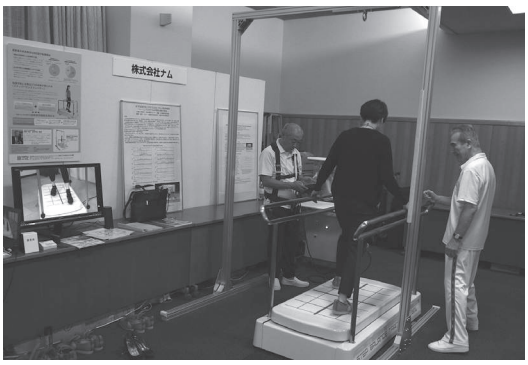
サンヨーホームズ株式会社



東洋羽毛東海販売株式会社

株式会社 FRONTEO ヘルスケア

パナソニック株式会社



株式会社ナム

雪印メグミルク株式会社

住友電気工業株式会社

フクダコーリン株式会社

ミドリ安全株式会社

報告　第 5 回学術集会 in 浜松　市民公開講座

実行委員　徳増 知子

第 5 回学術集会のプレ講座として，平成 30 年 10 月 6 日（土）10：00 ～ 12：00 にホテルクラウンパレス浜松にて開催された。定員 120 名で参加者を募ったところ，200 名を超える事前申し込みがあり，さらに，当日には，申し込みはしていないが参加したいという人で長蛇の列ができ，結果，230 名の参加で，盛会となった。

大会長の浜松医科大学教授鈴木みずえ氏の挨拶に続き，日本転倒予防学会理事長武藤芳照氏の基調講演「転倒予防川柳に学ぶ転ばぬ先の知恵」を行った。転倒死が，交通事故死の 2 倍という驚きのデータがあり，「交通事故が減ったのは，交通安全教室など，教育があるからこそ」という話が印象的だった。難しいことをわかりやすく，わかりやすいことを深く，深いことをおもしろく伝える武藤氏の話は，終始，笑いに包まれ，参加者の心に深く残った。ウィットとユーモアのある川柳がいくつか紹介されたが，「消えていく　足の感覚　妻の愛」と 15 歳の女子がよんだと聞いて，会場はどよめいた。

続いてはパネルディスカッション。渡邉洋氏を座長に，御代田町はつらつサポーター（長野県），生きがいリーダー「ハッピー」（牧之原市），転倒予防サポーター「転倒無し」（浜松市）の 3 グループが，活動発表を行った。市町からの委託事業や助成金で事業をしているグループもあったが，資金がないと悩むグループ，地域で温度差があり，活動が広がらないなどの課題を挙げたグループもあった。

そして，北湯口純氏の転倒予防体操体験を行った。5 つの動きを覚えた後，「365 歩のマーチ」の歌に合わせて行った。10 分程度しかなかったが，参加者は達成感を得られたようだった。

会場から出て行く参加者はみな笑顔で，「楽しかった」「おもしろくてためになった」と満足度は高く，「早速，地元のサロンで体操をやる」と意欲も高まった様子だった。

鈴木みずえ氏

武藤芳照氏

パネルディスカッション

北湯口純氏